土合弘光氏作成による「八木義徳の軌跡」(2010年5月3日公開)		
１９１１年 （明治４４）	十月二一日、北海道胆振國室蘭郡室蘭町大字札幌通四丁目（後、北海道室蘭市大町三三番地。現、室蘭市中央町一丁目）に父田中好治、母八木セイの次男（庶子）として生れる。兄一人、弟二人、妹一人の五人兄弟。 戸籍上は人力車業の村松和四郎、タセ夫婦の六男として入籍される。 生れるとすぐ沖仲士の小頭、内海初三郎、ヨネ夫婦の家に乳飲み児として預けられ、数え年三つまでこの乳母夫婦のもとで育てられる。 父、田中好治は明治十四年二月六日、山梨県東山梨郡春日居村（後東山梨郡春日居町、現笛吹市春日居町）生れ。東京帝国大學医科大學を卒業、請われて明治四一年七月、町立室蘭病院長となり、区立室蘭病院長を経て、大正十一年十月独立して田中病院を開業する。当時近在よりの患者が列をなし、また上顎癌患者が上京して東大の手術を乞うた際、室蘭の田中が第一人者であると戻され、田中の手術を受けたと伝えられるほど高名な外科医であった。 母、八木セイは明治二三年三月二五日、神官であった前田銈之助、モト夫婦の次女として、青森県東津軽郡油川村大字油川（後青森市油川町字大浜二四九番地、現青森市大字油川字大浜）に生れる。九歳の時、北海道後志國小樽郡曙町十八番地（現小樽市住ノ江）の海産物商、八木武右ェ門、ユン夫婦の養女となる。その後、養家が没落したため、明治三九年に室蘭町で芸妓となり、のち町立室蘭病院長になった田中好治と識り合う。	「或る女」（前篇）　有島武郎 『善の研究』西田幾多郎 『思い出』北原白秋 日英同盟協約調印 「雁」 森 鷗外 中国で孫文の辛亥革命おこる
１９１８年 （大正７）	七歳。四月、室蘭区立武揚尋常高等小学校（現室蘭市立武揚小学校）に入学する。この年の夏休み、室蘭に遊びに来ていた大学生の伯父に連れられ、青森県の母の生家を訪ね、ねぶた祭を見物する。	「生れ出づる悩み」有島武郎 「地獄変」芥川龍之介 米騒動おこる 1923年　関東大震災
１９２４年 （大正１３）	十三歳。四月、北海道庁立室蘭中学校（現北海道室蘭栄高等学校）に入学。 四年生から剣道部の選手となり、もっぱら剣道の稽古に熱中。たまたま同じ剣道部の選手で二歳年上の高松確郎から倉田百三の「出家とその弟子」を勧められて読む。これがいわゆる文学との最初の出会いとなった。ついで同君から有島武郎の「生れ出づる悩み」と「カインの末裔」を勧められて読み、深い感動と共に、初めて“文学”という新しい世界に眼をひらかれた。そして古本屋からドラマトルギーの参考書として『曾我廼家五郎全集』を購読し、初めて書いた戯曲「鰊漁場」(百枚）を『改造』の懸賞に応募するが落選する。 ただしこの頃は、将来外国航路の高級船員となって世界の港々を遍歴するのが最大の夢であった。	「痴人の愛」谷崎潤一郎 『御 身』横光利一 1925年　治安維持法公布 1926年 「海に生くる人々」 葉山嘉樹 1927年　芥川龍之介自殺
１９２８年 （昭和３）	十七歳。六月五日から九日間、東京・仙台・日光方面に修学旅行、初めての東京旅行であった。中学五年生のこの年、東京高等商船学校（現東京商船大学）の練習船「大成丸」が室蘭港に入港、室蘭中学校と剣道の交歓試合が行われる。その時に念願であった東京高等商船学校は、近視のため受験資格が得られないことが判り、受験を断念する。	「キャラメル工場から」 窪川いね子 「放浪記」林 芙美子 「上 海」横光利一
１９２９年 （昭和４）	十八歳。四月、やむなく、海に関係があり、近視でも入学できる北海道帝国大學附属水産専門部製造科（現北海道大学水産学部）を受験、入学する。 札幌市北十八条(現北区北十八条）、ついで札幌郡琴似村大字琴似（現札幌市北区新川）、札幌市南二条（現中央区南二条）、そして札幌市大通（現中央区大通）の時計台近くの代書屋の下宿で学生生活を過ごす。	「夜明け前」島崎藤村 「蟹工船」小林多喜二 「太陽のない街」徳永 直 世界恐慌が始まる
１９３０年 （昭和５）	十九歳。第二年目から学業に幻滅し、当時「円本」といわれた改造社版『現代日本文学全集』と新潮社版『世界文学全集』を手当たりしだいに乱読する。ついでドストエフスキー全集刊行会版『ドストエフスキー全集全十四巻』を読破、とくに「カラマーゾフ兄弟」（当版の表題）から甚大な感動をうける。 七月、級友の酒井 悠と二人で日本領南樺太（現ロシア連邦サハリン州）へ放浪の旅をし、当時樺太鉄道の終点であった新問という町で宿料を踏み倒したため、その代償としてオホーツク海に臨んだ西田鱒罐詰工場へ“ジャコ鹿（浮浪者	共産党シンパ事件で多数の 文学者が検挙される 「寝 園」『機 械』横光利一

	）”として売られ、約一カ月間の重労働に服する。この工場で、東北の貧しい農村から出稼ぎに来ていた雑夫達と知合い、彼らの生活の悲惨さに深刻な感銘をうける。以後社会科学の世界に眼をひらき、次第に左翼思想に入って行く。	『聖家族』堀 辰雄 「東倶知安行」小林多喜二
１９３１年（昭和６）	二十歳。五月、当局の左翼学生弾圧により、職員会議で退学させられることが決まったが、当時目をかけていてくれた若い助教授の助言により、学校から発令されないうちに自主退学する。 直ちに室蘭に帰り、上京する。東京府豊多摩郡杉並町大字高圓寺（現東京都杉並区高円寺）で下宿生活をする。 神田お茶の水の文化學院の教室を借りた夜間のロシア語講習会を受講、その講習会の「プロレタリア文学講座」の講師に、小林多喜二、中條百合子（後・宮本百合子）、窪川いね子（後・佐多稲子）らがおり聴講する。 十月、左翼運動の仲間の一人が逮捕されたことから、日本から旅券が無くて一番遠くに行ける所である中華民国のハルビン特別市に逃亡する為、客船で三泊四日を掛け神戸から当時中華民国からの租借地であった大連に渡る。その後列車でハルビンに着くも、そのハルビンの中国人旅館の一室で衝動的に自殺を図ったが、同宿の軍の慰安婦二名に助けられ未遂に終わる。思想容疑者として約一ヵ月間収監された後、日本内地へ押送される。その後、本籍地の室蘭市に送られ、室蘭警察署に留置される。思想係検事の取調べををうけ、“転向”して釈放される。	「時 間」横光利一 満洲事変起こる 「つゆのあとさき」永井荷風
１９３２年（昭和７）	二一歳。屈辱と自棄の季節。ドストエフスキーを再読、さらにショーペンハウエルの「意志と現識としての世界」から深い思想的慰藉をうける。 五月四日、戸籍上、実母八木セイの養子となり、八木姓を名乗る。	上海事件、五・一五事件起こる 「薔薇盗人」上林 暁
１９３３年（昭和８）	二二歳。四月、第二早稲田高等學院文科Ｉ組に入学、通称「諏訪の森」といわれた東京市淀橋区諏訪町百二十番地(現東京都新宿区高田馬場一丁目)藤森方の青葉館に下宿する。 六月、同級の中村八朗、山本 悟、三好次郎、深津吉之、権藤 猛、栗林 鼎、妹尾重威、世良波津夫、友田 豊、吉田豊二、安井絃二、八木義德の十二名で同人雑誌『くらるて』を発刊、この第一号に小説「 檻 」と詩「断 章」を発表。 七月、「 敵 」を『くらるて』に発表、『くらるて』はこの二号で終刊となる。学内から年に二回程発行されている『學友會雑誌』に「手 帖」と題するアフォリズム約五十篇ずつを三回にわたり発表、これは萩原朔太郎の「虚妄の正義」や「絶望の逃走」を模倣したものであった。	小林多喜二検挙され、獄死する 日本、国際連盟を脱退する 「春琴抄」谷崎潤一郎 「色ざんげ」宇野千代 「暢気眼鏡」尾崎一雄
１９３４年（昭和９）	二三歳。 三月、「内密話 - 或ひは「逃げ出す人」の話 - 」を『學友會雑誌』に発表。 六月、第三次『早稲田文學』復刊、編集主幹は谷崎精二がなる。 七月、「第七回改造懸賞創作」に、前年に小説「猫小路の子」九十枚程を書いて応募していたものが選外佳作二五名の中に選ばれ、『改 造』に発表される。 十月、同人雑誌『黙 示』を創刊、同人に上野俊介、大山芳夫、岡枝英元、久住欽一郎、住田恭平、多田裕計、辻 亮一、中村八朗、深津吉之、本庄栄一、山本 悟、八木義德の十二名。創刊号に小説「設 計」と随想「感 想」を発表。 十一月、「轉落の書」を『黙 示』に、三回にわたり発表。 十二月、下宿の近くの喫茶店で偶然に知り合った早稲田大學文學科英文學専攻二年生の辛島栄成につれられて、東京市世田谷区北澤二丁目一四五番地（現東京都世田谷区代沢二丁目十三）に住んでいた作家横光利一を訪問、以後その死まで師事する。この最初の訪問の日、作家中山義秀を紹介される。	「紋 章」横光利一 満洲国建国、溥儀皇帝になる 「 癩 」島木健作 『あにいもうと』室生犀星 『山羊の歌』中原中也
１９３５年（昭和１０）	二四歳。 二月、「横光利一作「時 計」の問題の一つ」を、三月、「文學のレアリティについて」を『黙 示』に発表。 四月、早稲田大學文學部文學科仏蘭西文學専攻に進学。第一早稲田高等學院からきた作家長見義三と識合い、以後終生の友となる。	「ドストエフスキイの生活」小林秀雄

	十月、久保田りよと結婚（届出日は昭和十三年七月二三日付）。りよは大正五年十二月四日、久保田利助、よし夫妻の長女として、東京市本所区林町一丁目（後、東京市本所区堅川一丁目二一番地。現、東京都墨田区立川一丁目）で生れる。結婚式は新宿の料理屋の二階で、両方の家族五人で夕食を摂るだけの質素なものであった。東京市豊島区目白町（現東京都豊島区目白）の省電目白駅に近い安アパートに住む。	「仮装人物」徳田秋声 芥川賞・直木賞が創設される 「ダス・ゲマイネ」太宰 治
１９３６年 （昭和１１）	二五歳。 三月、「墻（まがき）」を『黙 示』に、九月、「青年のヒューマニズム―生命の図式」を『行動文學』に発表。 この年の春頃、東京市王子区上十条町一二六九番地（現東京都北区上十条）に転居、六畳二畳の二間で家賃は月十円であった。	二・二六事件起こる 「いのちの初夜」北条民雄 「風立ちぬ」堀 辰雄
１９３７年 （昭和１２）	二六歳。 一月、「海霧期」を『黙 示』に発表、「第二回同人雑誌クラブ賞」候補作となる。 二月、「海 豹」を『早稲田文學』に発表、横光利一にはじめて褒められる。この時の『早稲田文學』編集長は尾崎一雄、次号から浅見 淵となる。 五月、「亨楽神仙」を『野 火』に発表。 六月十日、父田中好治、レントゲン過量曝射による癌により東京市豊島区西巣鴨二丁目二六一五（現東京都豊島区上池袋一丁目三七）の癌研究会附属康楽病院（現癌研究会附属有明病院）にて死去する、享年五六歳。 七月、「おがの子」を『早稲田文學』に、十月、「見神記」を『野 火』に発表。	「路傍の石」山本有三 「澪東綺潭」永井荷風 「旅 愁」横光利一 日中戦争始まる 「火山灰地」久保 栄
１９３８年 （昭和１３）	二七歳。 一月、大学卒業に向け、妻りよを伴い故郷北海道に五年ぶりに帰省する。これは夫妻にとって結婚報告を兼ねた初めての北海道旅行となった。 三月、「さて去らんかな」を『早稲田大學新聞』に発表。早稲田大學を卒業。二九日、東京市中野区川添町四番地(現東京都中野区東中野一丁目)に転居。 四月、東京市城東区亀戸町（現東京都江東区亀戸）のミヨシ化學工業株式会社に入社する。 七月、「夏の海」を『早稲田文學』に、「遺児たち」を『野 火』に発表。 八月、満洲国奉天市鉄西工業地区に新会社、満洲理化學工業株式会社を設立するため（後満洲国奉天市鉄西区興工街二段十号に設立）先発社員として、妻りよを伴い渡満。奉天市内の住宅状況が悪く、奉天市（現中華人民共和国遼寧省瀋陽市）大和区隅田町八 八十川方、同市大和区住吉町 奉天ビル二七八号、同市大和区柳町四 常盤荘一～六号、同市鉄西区房産住宅等市内数ヵ所に住む。以後五年間、社業に追われ文学から少なからず遠ざかるも、浜野健三郎、飯河四郎、紅谷美津、また日向伸夫ら『作 文』同人達の交友によって文学への渇を癒やす。	「天の夕顔」中河与一 国家総動員法公布 「厚物咲」中山義秀 「乗合馬車」中里恒子 「石狩川」本庄陸男
１９３９年 （昭和１４）	二八歳。 二月、「奉天通信」を『早稲田文學』に発表。 五月二十日、ノモハン事件勃発。 六月、応召して錦洲の部隊に入隊したが、一ヵ月の訓練で除隊する。	「如何なる星の下に」高見 順 「愛と死」武者小路実篤 第二次世界大戦始まる
１９４０年 （昭和１５）	二九歳。 三月、早稲田大学時代の恩師、吉江喬松先生の訃報が届く。 九月、「善意の世界 - 「是好日」によせて - 」を『作 文』に、「讀書術について」を『収書月報』に発表。 十一月二九日、弟義豊が病死する。 十二月から翌年一月に掛け、約一ヵ月に渡り日本に帰国する。	「或る作家の手記」島木健作 「得能五郎の生活と意見」伊藤 整 大政翼賛会が結成される
１９４１年 （昭和１６）	三十歳。 二月、「日本管見」を『収書月報』に、六月、「劉廣福」を『満洲觀光聯盟報』に、七月、「苦蟲と作品」を『作 文』に、九月、「新涼の奉天」を『満洲觀光聯盟報』に発表。 十二月、ハワイ真珠湾攻撃の報を、出張中の大連大和ホテルの一室で聞く。	「菜穂子」堀 辰雄 「花ざかりの森」三島由紀夫 『銀河鉄道の夜』宮澤賢治 太平洋戦争始まる
１９４２年	三一歳。 五月、妻りよが病弱なことから、東京出張を機に妻を日本に戻す	「無常ということ」小林秀雄

（昭和１７）	ため夫妻で帰国する。三ヶ月間の出張を終え、妻を置いて満洲に戻る。	『北の旅』徳田一穂
１９４３年 （昭和１８）	三二歳。 一月、満洲理化學工業株式会社を退社、前年に帰国していた妻と、元の住まい東京市中野区川添町に住む。 二月二四日、長男史人誕生する。 六月、「匂いの跡」を『早稲田文學』に発表。 東亜旅行社（後日本交通公社、現ジェイティービー）に入社。東京支社業務部文化課勤務となり、北條紫陽、高橋敏彦、桜木孝を知る。本社文化部には今官一、北條誠、戸塚文子らがいた。	「細 雪」谷崎潤一郎 『大和古寺風物誌』亀井勝一郎 大東亜文学者決戦会議開催
１９４４年 （昭和１９）	三三歳。 二月、小説「劉廣福」を脱稿、『日本文學者』発刊事務所に届ける。戦時下の言論統制と紙不足のため、全国の同人雑誌はたびたび統廃合され、この当時東京では日本青年文學者会に属する同誌一誌のみとなっていた。 三月十三日、応召入隊。十一日夜上野駅から師横光利一らに見送られ金澤に発ち石川県金澤市東部第四九部隊に二等兵として入隊。小原大隊第二中隊に編成され門司港から中華民国山東省青島に上陸する。門司で同じ大隊の第三中隊に作家である深田久彌中尉のいることを知り、集結地同国江蘇省南京で初めて挨拶をする。湘桂作戦に参加するため同国安徽省蕪湖より行軍を起す。 四月、「劉廣福」が『日本文學者』創刊号に発表される。 八月十五日、小説「劉廣福」が「第十九回芥川龍之介賞」を受賞、日本文學振興会より発表され、『文藝春秋』九月号に発表と選評が、同十月号に受賞作品「劉廣福」が掲載される。 十月、中華民国湖南省長沙から衡陽への行軍途中、泥だらけになった芥川賞受賞の通知をうける。第三中隊の作家深田久彌から英国たばこスリーキャッスル三箱をお祝いにもらう。	「義貞記」石川 淳 東条英機内閣総辞職する 「津 軽」太宰 治
１９４５年 （昭和２０）	三四歳。 前年末より南部粤漢打通作戦に参加、所属の奥村・硎野中隊は主として中華民国湖南省衡陽の第二十軍司令部の直接警備にあたる。 八月十五日、衡陽にて敗戦、上等兵からポツダム兵長となる。敗戦後、衡陽から中華民国江蘇省上海まで数ヵ所、約九ヵ月間の抑留生活をおくる。	『悉皆屋康吉』舟橋聖一 東京大空襲、日本降伏する 「パンドラの匣」太宰 治
１９４６年 （昭和２１）	三五歳。 五月十五日、中華民国上海よりＬＳＴ（米軍の上陸用舟艇母艦）に乗り山口県仙崎港に上陸、復員する。十七日、東京に帰り、妻りよと長男史人が前年三月十日未明の東京大空襲によって義弟妹、光一、より子、のり子三人と伴に、妻の実家東京都本所区堅川（現東京都墨田区立川）で焼死したことを初めて知る。神奈川県横浜市鶴見区馬場町一八六番地(現横浜市鶴見区北寺尾1丁目八番）の、母セイが同居していた、兄八木義弘夫婦の家に転げこむ。 六月、日本交通公社（元東亜旅行社）を退社。 七月、「帰来数日」を『早稲田文學』（二一年九月発行）に、十二月、「母子鎮魂」を『文藝春秋』に発表。	昭和天皇が人間宣言 「死 霊」埴谷雄高 「暗い絵」野間 宏 「聖ヨハネ病院にて」上林 暁 「桜 島」梅崎春生
１９４７年 （昭和２２）	三六歳。 六月、東京都千代田区にあった東京学童新聞社に嘱託として入社。 七月十九日、NHKラジオ第二放送で一時間の書下しラジオドラマ「海霧期」が放送される。 十月、「相聞歌」を『文學界』に、「胡沙の花」を『肉 体』に、十一月、「わがつれづれ草」を『文 藝』に発表。 十二月三十日、師横光利一、胃潰瘍に腹膜炎を併発して死去、享年四九歳。翌月三日、東京都世田谷区北澤の自宅にて告別式が営まれ参列する。	日本国憲法施行 「重き流れのなかに」椎名麟三 「哭 壁」丹羽文雄
１９４８年 （昭和２３）	三七歳。 一月、半商業的同人雑誌『文藝時代』が創刊され、同人となる。同人に青山光二、阿部知二、伊藤 整、井上弘介、梅崎春生、江口榛一、倉本兵衛木暮 亮、坂口安吾、桜田常久、佐藤晃一、椎名麟三、芝木好子、高木 卓、高橋義孝、竹越和夫、武田泰淳、太宰 治、多田裕計、田辺茂一、坪田譲治、土井虎賀寿、徳田一穂、豊田三郎、楢崎 勤、野口冨士男、花田清輝、林 芙美子福田清人、福田恆存、舟橋聖一、船山 馨、北條 誠、松岡照夫、八木義徳。	「虫のいろいろ」尾崎一雄 「俘虜記」「野 火」大岡昇平 「帰 郷」大佛次郎

	まさに呉越同舟で、戦後文壇の混乱期の産物であった。この創刊号に「角度と照明」を発表。 二月、「現代のピグマリオン」を『文藝復興』に、「仮面の蔭に」を『文藝時代』に発表。 三月、短篇小説集『母子鎮魂』を世界社より刊行。 七月十日、早稲田大學時代の同世代の仲間達で、「十五日会」を発展させた「十日会」をつくり、『文學者』発刊の編集会議が開かれる。会員に荒木太郎、石川利光、市川為雄、小田仁二郎、澤野久雄、榛葉英治、鈴木幸夫、多田裕計、辻 亮一、恒松恭助、中村八朗、野村尚吾、浜野健三郎、藤川徹至、松下達夫、宮内寒彌、森田素夫、八木義徳。準会員に海野謙三、越智信平。 「私のソーニャ」を『個 性』に、「死と笑い」を『早稲田文學』に発表。 十月、十日会編集の同人誌『文學者』が創刊され、編集委員の一人となる。 十一月、「美しき晩年のために」を『中央公論』に、「寄食者」を『作品』に発表。	「人間失格」太宰 治 太宰 治が自殺する 「テニヤンの末日」中山義秀 極東軍事裁判最終判決 『小説の方法』伊藤 整
１９４９年 （昭和２４）	三八歳。 一月、「宿 敵」を『文藝時代』に、二月、「運河の女」を『別冊文藝春秋』に、「茶色のズボンを買いに」を『知識人』に発表。 三月、短篇小説集『私のソーニャ』を文藝春秋新社より刊行。 五月、「黒白の髪」を『群 像』に発表。第四次『早稲田文學』が復刊され、編集委員の一人となり、その復刊号に「触手について」を発表。 二八日から五十日間にわたり、十一年ぶり故郷北海道に帰り各地を旅する。故郷北海道の大自然の風土の中から、「北方的精神」と「自己回復」を見いだした旅となる。この旅で詩人更科源蔵と識り合う。 七月、『文藝時代』終刊。 八月三日、野口冨士男に誘われて、豊田三郎、舟橋聖一、船山 馨、北條誠、三島由紀夫とともに「キアラの会」を結成する。のち有吉佐和子、有馬頼義、井上 靖、遠藤周作、北 杜夫、源氏鶏太、澤野久雄、芝木好子、林芙美子、日下令光、三浦朱門、水上 勉、吉行淳之介が加わり、その後有吉佐和子、北 杜夫、三島由紀夫が中途退会する。 十月、「さいはての恋」を『別冊小説新潮』に発表。 十二月、短篇小説集『美しき晩年のために』を大日本雄弁会講談社より刊行。横光利一著『家族会議』（新潮文庫）に「解 説」を発表。	「山の音」川端康成 「芸術と実生活」平野 謙 『仮面の告白』三島由紀夫 三鷹事件・松川事件起こる 湯川秀樹ノーベル物理学賞受賞 「浮 雲」林 芙美子
１９５０年 （昭和２５）	三九歳。 一月、「二度目の嘘」を、二月、「二度目の嘘 続篇」を『新 潮』に、三月、「網走刑務所」を『別冊文藝春秋』に、五月、「大癒の面」を『文 藝』に発表。 四月十六日、早稲田大学時代の友人上野俊介が戦後すぐに死去、従弟である上野 巍宅（東京都中野区）に学友の多田裕計らと集まり、「上野俊介遺作集」刊行の編集委員会を発足させる。 七月、『文學者』が復刊、作家丹羽文雄が主宰となる。「脱獄者」を『中央公論』に発表。 三日、兄義弘、癌を苦に厭世自殺をする。 三一日、ＮＨＫラジオ第二放送で書下しのラジオ小説「アカシヤの街にて」が放送される。 八月、北海道に旅行、札幌、函館、そして上磯郡上磯町字三石（現北斗市三ツ石）にある男子トラピスト修道院「厳律シトー会灯台の聖母大修道院」を見学する。「摩周湖」を『別冊文藝春秋』に発表。 十二月、「フレップと海豹」を『小説新潮』に発表。	「異邦人」辻 亮一 「遙拝隊長」井伏鱒二 「異形の者」武田泰淳 朝鮮戦争始まる 「人間襤褸」大田洋子
１９５１年 （昭和２６）	四十歳。 一月、「聖なるひとびと」を『別冊小説新潮』に、二月、「襖の絵文字」を『新 潮』に、五月、「念願する女」を『別冊小説新潮』に、八月、「思い出」を『上野俊介遺作集 丹 頂』に、「監 房」を『新 潮』に発表。 十月十日、十日会で丹羽文雄の全快祝いを兼ねて、石川利光、宮内寒彌ら十名で群馬県伊香保温泉に一泊旅行、作家森田素夫の生家古久屋に泊まる。 十一月、第五次『早稲田文學』復刊、編集委員の一人となり、その復刊号に「定期券没収」を発表。 同月十八日（届出は昭和二七年十月十五日付）、中込正子と結婚。正子は昭和四年三月十八日、中込清太郎、ゆきえ夫妻の七人兄弟の次女として、	「 壁 」安倍公房 伊藤 整のチャタレイ裁判始まる 「広場の孤独」堀田善衛

	山梨県中巨摩郡在家塚村一三五番地（後山梨県中巨摩郡白根町大字在家塚、現南アルプス市在家塚）で生れる。 十二月、「黄菊白菊」を『文 藝』に、「無門堂主人の失踪」を『群 像』に発表。	「原色の街」吉行淳之介
１９５２年 （昭和２７）	四一歳。 一月十二日、十日会会員十五名で丹羽文雄の招待による、神奈川県の箱根温泉「一の湯」に一泊旅行をする。 一月、「旅の音色」を『別冊小説新潮』に、四月、「幸福譚」を『新 潮』に発表。 六月一日から一週間にわたり、保高徳蔵、若杉 慧、田辺茂一、多田裕計と金沢、福井方面に講演旅行。永平寺、東尋坊などを見て廻り、金沢に軍隊で世話になった深田久彌を訪ねる。 七月三一日から約二週間にわたり、「室蘭市市制三十周年・開港八十周年記念文化講演会」講演を兼ねた北海道旅行をする。途中、作家有島武郎の名作「生れ出づる悩み」の主人公のモデル、画家木田金次郎を岩内郡岩内町字清住の自宅に訪ねる。その後、オホーツク海方面を旅行する。 八月、「果 実」を『群 像』に、十月、「漁夫画家」を『文學界』に発表。 十一月二日から三日間、十日会主催で群馬県前橋市での「文芸講演」と四万温泉旅行が行われ、丹羽文雄、石川利光、中村八朗らと伴に参加する。	『真空地帯』野間 宏 「蛇と鳩」丹羽文雄 破防法が成立する 「昭和文学盛衰史」高見 順
１９５３年 （昭和２８）	四二歳。 二月、「小春日和」を『群 像』に、三月、「湖 畔」を『文 藝』に発表。 五月、「青頭巾」を『群 像』に、当初匿名小説として氏名は次号に発表した。 七月二日、北海道放送ラジオより「北海道風土記－八木義徳と摩周湖」が放送される。 九月、「昔の仲間」を『文學界』に、十月、「璞の人　師・横光利一」を『新 潮』に発表。 十一月五日、作家吉村 昭と作家津村節子が東京都台東区上野公園の上野精養軒で結婚式を挙げ、仲人として披露宴に夫妻で出席する。 十二月、「御 柱」を『群 像』に発表。十八日、ラジオ東京放送より、ラジオ掌編「横光利一『御 身』」の解説をし、それが放送される。	ＮＨＫがテレビ放送を開始 「姉 妹」畔柳二美 「絵島生島」舟橋聖一 『島崎藤村論』亀井勝一郎
１９５４年 （昭和２９）	四三歳。 一月、「一本の線」を『新 潮』に発表。 三月一日より六月九日まで、「野性の舞踏」を『北海道新聞』夕刊に百回にわたり連載する。 八月、「陸 橋」を『群 像』に発表。 九月、「批評について」を『文學者』（五十号記念特集）に発表。 二六日、『文章倶楽部』神奈川支部主催で「八木義徳さんを囲む会」が横浜市鶴見区下末吉の平木國夫宅で開かれ出席する。 十月、「少女図」を『新 潮』に、十二月、「或るブロンズ像の話」を『文學界』に発表。	「驟 雨」吉行淳之介 ビキニ海域「死の灰」事件 「ボロ家の春秋」梅崎春生 「アメリカン・スクール」小島信夫 「プールサイド小景」庄野潤三
１９５５年 （昭和３０）	四四歳。 一月、「詩集と作文」を『群 像』に発表。 四月、短篇小説集『野女物語』を山田書店より、六月、長篇小説『野性の舞踏』を北辰堂より刊行。 六月十八日、早稲田ペンクラブ主催「第一回文芸講演会」が東京都新宿区西早稲田一丁目の早稲田大学二一号館大教室で催され、「文学青年について」と題し講演する。 七月、「翳ある墓地」を『新 潮』に、八月、「田舎紳士」を『文 藝』に、十月、「暑い日」を『文學界』に、十一月、「海 霧」を『文 藝』に発表。 十二月、「私の辞書」を『新日本文学」に発表。 短篇小説集『七つの女の部屋』（コバルト新書２８）を鱒書房より刊行。	「流れる」幸田 文 「白い人」遠藤周作 『松川裁判』広津和郎 「太陽の季節」石原慎太郎 第一回原水禁世界大会広島大会
１９５６年 （昭和３１）	四五歳。 二月、「船山 馨のこと」を『新 潮』に発表。 四月、「あした鳴る鐘」を『高校コース』に一年間連載する。 五月、「 女 」を『新 潮』に発表。 横光利一著『實いまだ熟せず』（角川文庫）	「金閣寺」三島由紀夫

	に「解 説」を発表。 七月、短篇小説集『 女 』（河出新書）を河出書房より刊行。 十二月、「同居者」を『群 像』に発表。	「紫苑物語」石川 淳 スエズ・ハンガリー動乱起きる
１９５７年 （昭和３２）	四六歳。 二月、「暗い眼」を、四月、「師 ・ 横光利一に」を『新 潮』に発表。 五月、文芸時評「文芸手帖」を『婦人朝日』に五八年十二月まで二年間、二十回にわたり連載する。 六月十一日、北海道室蘭市栄町にある母校「北海道室蘭栄高等学校」創立四十周年記念式典に出席、「われらが青春の時」と題し記念講演を行う。また当日、市立室蘭図書館主催の文芸講演会が同市本町二丁目の市立室蘭図書館で催され、「文学的才能について」と題し講演する。 その後、二十日間に渡り北海道各地を旅行し、釧路で作家原田康子夫妻に会う。 八月、「文学の鬼を志望す」を『新 潮』に、九月、「崖の上の樹」を『群 像』に発表。 十月、十五年ぶり京都、奈良方面へ一週間の旅行をし、多くの寺社を観てまわる。 「かわさき文学賞の会」主催による「かわさき文学賞コンクール」が創設され、第一回から選考委員をつとめる。（第二回から作家平田小六が選考委員に加わる。） 十一月二四日、投稿文芸雑誌『文章クラブ』神奈川支部主催の「作家を囲む会」が神奈川県横浜市西区紅葉ケ丘の神奈川県立図書館講堂で催され、講師として講話を述べる。	「天平の甍」井上 靖 「アポロンの島」小川国夫 「死者の奢り」大江健三郎 ソ連、初の人工衛星打上げに成功する 「裸の王様」開高 健
１９５８年 （昭和３３）	四七歳。 三月、「孤高の魅力」を『新 潮』に、四月、「困った日々」を『中央公論』に発表。 六月四日から三日間、画家田中祥三と北海道倶多楽湖へ取材旅行をする。 七月十二日から昭和四一年三月五日まで、月一回約九年間にわたりＮＨＫラジオ第二放送「療養の時間」でコントの選者を務める。 十月、「倶多楽湖」を『新 潮』に発表。 十一月四日、警察官職務執行法（警職法）改正案について、日本文藝家協会臨時総会が東京都港区六本木の俳優座で開催され反対決議をし、作家高見順を先頭に約七十名の会員と共に、新橋駅前までのデモ行進に参加する。	「飼 育」大江健三郎 「かげろうの日記遺文」室生犀星 警職法反対闘争起きる 「朴達の裁判」金 達寿
１９５９年 （昭和３４）	四八歳。 一月、「峠の歌」を『みどり』（學燈社）に、「同人雑誌評」を『早稲田文學』にそれぞれ半年間連載する。 二月、北海道内の同人誌を対象にした誌評、「道内同人雑誌評」を『北海タイムス』に、十二月まで十一回にわたり連載する。 三月五日から、「倶多楽湖」がラジオドラマとしてＮＨＫ札幌放送より四週連続で放送される。 四月、津村節子著『華 燭』（次元社刊）の出版記念会が催され、丹羽文雄、作家石川利光らと共に出席する。 十四日、北海道放送テレビ「木田金次郎さんとその作品」で、木田金次郎との対談が放映される。 五月二十日、「作家・小田仁二郎を励ます会」が東京都千代田区平河町二丁目の日本都市センター会館で催され、丹羽文雄、文芸評論家浅見 淵、作家外村 繁、作家火野葦平、作家杉森久英、作家宮内寒彌らと共に出席する。 九月、「妻の人形」を『新 潮』に発表。 新潟県直江津市に、中山義秀と共に講演旅行をする。 十二月、「 影 」を『群 像』に発表。 二五日、横光利一が小学校時代過した三重県阿山郡伊賀町柘植町（現伊賀市柘植町）の柘植公民館横に「横光利一文学碑」が建立され、その除幕式に遺児横光象三、佑典兄弟、川端康成、中山義秀らと共に出席する。	「敦 煌」井上 靖 「珍品堂主人」井伏鱒二 「死者の時」井上光晴 ソ連ロケット初めて月面着地 「灰色の午後」佐多稲子 「海辺の光景」安岡章太郎
１９６０年 （昭和３５）	四九歳。 四月、「初 恋」を『高校コース』に一年間連載する。「若人文壇・選者のことば」(投稿小説の選評）を『若 人』（後、六二年六月から『若い人』と改題）に六三年五月まで連載する。	「いやな感じ」高見 順 安保改訂阻止闘争激化する

	八月、長篇小説『あした鳴る鐘』（ジュニアシリーズ１１１）を秋元書房より刊行 十月、宣伝用文芸誌『風 景』が創刊され、その編集は「キアラの会」が担当することになり、その創刊号に「書 評　北 杜夫著『夜と霧の隅で』」を発表。	「死の棘」島尾敏雄 「忍ぶ川」三浦哲郎
１９６１年 （昭和３６）	五十歳。 三月、「ある笑い」を『風 景』に発表。 長篇小説『私は愛する』（ジュニアシリーズ１２５）（「初 恋」を改題）を秋元書房より刊行。 四日から十五日間にわたり、秋元書房の依頼で四国遍路の旅に出、八十八カ所の札所をバスと徒歩で巡拝する。 四月、「恩 人」を『文學者』に、六月、「四國遍路の旅」を『新 潮』に発表。 八月、短篇小説集『摩周湖』（ぷやら新書４）をぷやら新書刊行会より刊行。 九月、カメラマンの車に同乗し、再び四国の主な観光地を六日間で一周する。	「風流夢譚」事件起きる 「凶徒津田三蔵」藤枝静男 『充たされた生活』石川達三 「瘋癲老人日記」谷崎潤一郎
１９６２年 （昭和３７）	五一歳。 三月、「 鳥 」を『新 潮』に、「微笑の人」を『高校コース』に発表。 四月、長篇紀行『四国遍路の旅 - 観光地から山寺まで - 』（トラベル・シリーズ３３）を秋元書房より刊行。 七月、「青いもの」を『新 潮』に、「仲間の面々 キアラの会」を『群 像』に発表。 九月十一日、中山義秀の小説「 碑 」の舞台である福島県岩瀬郡長沼町大字長沼字殿町（現須賀川市長沼字殿町）の長沼城址に中山義秀文学碑「いしぶみ文学碑」が建立され、その建碑式に出席する。 十一月、横浜市港南区港南四丁目にある法務省矯正局東京矯正管区横浜刑務所の受刑者投稿雑誌「埠 頭」創作欄の選者を、七十年五月まで務める。また同時期、千葉県千葉市若葉区貝塚町にある同区千葉刑務所の「貝 塚」、札幌市東区東苗穂二丁目にある同省同局札幌矯正管区札幌刑務所の「北 光」創作欄の選者をそれぞれ努める。	「楡家の人びと」北 杜夫 東京都三河島で電車二重衝突事故発生 『大陸の細道』木山捷平 「夏の終り」瀬戸内晴美 「悲の器」高橋和巳
１９６３年 （昭和３８）	五二歳。 三月、「 的 」を『新 潮』に、四月、「海霧の町で」を『群 像』に発表。 四月二八日、寺崎 浩著『情 熱』（新潮社刊）出版記念会が東京都中央区銀座五丁目のサッポロ銀座ビアホール（現ライオン銀座五丁目店）で催され、野口冨士男らと共に出席する。 五月二五日から二日間、作家多田裕計主宰の句誌『れもん』山梨会が山梨県南巨摩郡増穂町小室の小室山妙伝寺で開催され参加、句を発表する。 七月、吉村 昭著『少女架刑』（南北社刊）に「解 説」を発表。 八月、「居酒屋めぐり」を『風 景』に、十一月、「気にかかる」を『新 潮』に発表。	「砂の上の植物群」吉行淳之介 「咲 庵」中山義秀 「狂い凧」梅崎春生 「地の群れ」井上光晴 三井三池鉱でガス爆発事故
１９６４年 （昭和３９）	五三歳。 六月、「書評禍」を『風景』に発表。 七月二三日、作家本庄陸男の故郷、北海道石狩郡当別町字太美町（現同町字ビトエ）の石狩川畔に本庄陸男文学碑「文学碑 石狩川」が建立され、その除幕式に作家伊藤 整、作家船山 馨、山田たま子（作家山田清三郎夫人、元本庄陸男夫人）らと共に出席する。 除幕式後記念講演を行い、また「北海道文学集会」が開催され参加する。 また当日、北海道放送ラジオより「座談会・本庄陸男二五周年忌を迎えて」が放送され、その座談会に出席する。 同月三十日、中学生時代からの友人蛯子哲二（当時、北海道副知事）が死去、その北海道庁葬が札幌市中央区南六条西一丁目の新善光寺で執り行われ参列、弔辞を読む。 九月、「若い遍路僧の話」を『日本』に、十二月、「ある弁明」を『風景』に発表。	「されどわれらが日々」柴田 翔 「夜の鶴」芝木好子 「死の淵より」高見 順 東海道新幹線が開業する 東京オリンピックが開催される
１９６５年 （昭和４０）	五四歳。 一月、「飾り玉」を『風 景』に発表。 三月、名古屋の作家社（主宰・作家小谷 剛）主催による文学賞「作家賞」が創設され、その選考委員を第一回より務める。 四月、「青い水平線」を『高校家庭クラブ』に六六年三月まで一年間連載する。 五月、「返り花」を『新 潮』に、十月、「挿 話」を『風 景』に、十二月、「働き者の血」を『文 藝』に発表。	「黒い雨」井伏鱒二 「玩 具」津村節子 「抱擁家族」小島信夫 朝永振一郎ノーベル物理学賞
１９６６年	五五歳。 四月、文京女子短期大学（現文京学院短期大学）英語英文学科、	『沈 黙』遠藤周作

（昭和４１）	一般教育科目［人文関係科目］の非常勤講師となる。 五月、長篇小説『友あり愛あり』（ジュニアシリーズ２５６）（「青い水平線」を改題）を秋元書房より刊行。 九月、「うますぎる小説」を『文学者』に発表。 二三日、讀賣映画社制作「北海道百年記念映画」のための座談会が行われ、出席する。 十月十三日から四日間、毎日放送テレビ「日本の名作　有島武郎・生れ出づる悩み」撮影のため、札幌、ニセコ、岩内、積丹半島方面をロケーションした。 十二月十三日、「日本の名作　有島武郎・生れ出づる悩み」で解説者として出演、ＮＥＴテレビ（日本教育テレビ、現テレビ朝日）系列で放映される。	中国に文化大革命が起こる 「戦艦武蔵」吉村 昭 「華岡青洲の妻」有吉佐和子 「夏の流れ」丸山健二
１９６７年 （昭和４２）	五六歳。 四月、「高１文芸 - 選者のことば」を『高１コース』に二年間連載する。 六月、「笑う男」を『風 景』に、「四つの危機」を『新 潮』に発表。 七月、「新刊月評」を『新刊ニュース』（東京出版販売発行）に毎月一回ずつ、以後六年九ヵ月間、七四年四月まで八一回にわたり連載する。 同月二四日、北海道室蘭市東町三丁目の母校「北海道室蘭栄高等学校」創立五十周年記念式典に出席する。その後夫妻で初めて道南地方を旅行する。 十月、「われは蝸牛に似て」を『新 潮』に発表。 北海道新聞社主催による「北海道新聞文学賞」が創設され、第一回より審査委員を務める。 三一日、その第一回受賞式が札幌市中央区大通西三丁目の北海道新聞社本社内の道新ホールで行われ出席、「北海道新聞文学賞」と題し記念講演を行う。	「万延元年のフットボール」 大江健三郎 「空気頭」藤枝静男 米国でベトナム反戦大集会 「好きな女の胸飾り」舟橋聖一
１９６８年 （昭和４３）	五七歳。 四月、「恵山岬」を『風 景』に発表。「雁の歌」を『全国学園新聞』（旺文社発行）に連載する。 社団法人・日本文藝家協会の理事に選任される（昭和四十七年三月まで務める）。 五月十八日から五日間、夫妻で山形県地方を旅行、山形、山寺、最上川、羽黒山と松尾芭蕉の「奥の細道」を巡る旅となる。 八月二一日から三日間、作家中村八朗らと共に東北地方を旅行する。	「重き流れに」佐多稲子 「年の残り」丸谷才一 「水俣病」国が責任を認める
１９６９年 （昭和４４）	五八歳。 一月、「戦後文学に現れた男の心理、女の心理」を『友 愛』（ゼンセン同盟発行）に一年間連載する。 十日、東京都町田市山崎町二二〇〇番地山崎団地二号棟二番四〇三号へ転居する。 二月、「雪の夜の記憶」を『国民評論別冊 雪の夜話北海道』に発表。 六月三日から四日間、作家三浦綾子夫妻、詩人新川和江、作家瓜生卓三、作家八重樫 實夫妻と、北海道十勝地方の十勝川・糠平温泉への旅をする。その帰り七日、白老郡白老町字竹浦の虎杖浜温泉にあるアヨロ温泉旅館で室蘭中学校の同窓会「室中四八会」四十周年記念総会が開催され出席する。 九月、学習研究社版『現代日本の文学 舟橋聖一集』の「悉皆屋康吉」紀行文執筆のため、東京、水戸、那珂湊、京都と、一週間にわたり取材旅行をする。 十月、「ある酒詩人の死」を『文學界』に発表。 十二月、作家和田芳恵の紹介により、俳人八幡城太郎が主宰する「青芝俳句会」の「青芝友の会」会員になる。これより、毎年四月二九日に神奈川県相模原市上鶴間（現同市上鶴間本町三丁目）の青柳寺で開かれる青芝友の会主催の句会「竹の子句会」に随時参加し、俳句を発表する。	東大安田講堂攻防等大学紛争激化する 「情 況」吉本隆明 「またふたたびの道」李 恢成 「深い河」田久保英夫 米国の宇宙船月面着陸に成功 「富 士」武田泰淳 「アカシヤの大連」清岡卓行
１９７０年 （昭和４５）	五九歳。 一月、「戦後文学に現れた青春像」を『友 愛』に一年間連載する。 二月、『現代日本の文学２８ 舟橋聖一集』（学習研究社刊）に「悉皆屋康吉を追跡する ― 舟橋聖一文学紀行」を発表。 四月、『風 景』編集長を十四カ月間担当し、編集後記をその間発表する。 六月、積丹半島、江差と画家田中祥三と共に北海道日本海沿岸を旅行する。 十二月、「漁師の歩く道」を『文學界』に発表。	「あの日この日」尾崎一雄 「瓦礫の中」吉田健一 「杏 子」古井由吉 三島由紀夫が割腹自殺をする
１９７１年 （昭和４６）	六〇歳。 一月、「人生の言葉」を『友 愛』に十五カ月にわたり連載する。 三月十日より四月二六日まで、自叙伝「私の文学」を『北海道新聞』夕刊に、四十回にわたり連載する。	「日本文壇史」瀬沼茂樹

	四月、短篇小説集『摩周湖』を土筆社より刊行。	
	五月、作家浅見 淵、作家野村尚吾、作家長見義三らと北海道の雷電海岸、ニセコ、登別へ三泊四日の旅行をする。 十八日から二四日まで、学習研究社版『現代日本の文学 横光利一集』文学紀行執筆のため、北九州、関西、東北方面を一週間にわたり取材旅行をする。	「謝肉祭」津島佑子
	六月、「島に行くまで」を『文 藝』に発表。	日米沖縄返還協定に調印
	七月、中山義秀著『中山義秀全集 全九巻』が新潮社から刊行され、その編集委員の一人となり、九月、『中山義秀全集 第三巻』に「解 説」を発表。	
	八月二一日、戦友会の「衝陽会」総会が石川県加賀市片山津温泉堂後のよしのやホテルで催され、出席する。	
	十月一日、平木國夫著『空気の階段を登れ』（朝日新聞社刊）出版記念会が東京都新宿区新宿三丁目の新宿ステーションビルレインボーホールで催され出席、祝辞を述べる。	志賀直哉死去する 「夏の闇」開高 健
	十一月二一日から二六日まで、青森県の津軽半島にある十三湖をはじめとする、津軽地方を巡る旅をする。	
	十二月、随筆集『私の文学』を北苑社より刊行。	「オキナワの少年」東 峰夫
１９７２年（昭和４７）	六一歳。 一月十二日、『私の文学』出版記念祝賀会が札幌市中央区北一条西四丁目の札幌グランドホテルで、作家野口冨士男、船山 馨、原田康子らが出席し開催され、夫妻で出席する。	「天の魚」石牟礼道子 札幌冬季オリンピックが開催
	三月二七日から四日間、親しい作家と編集者との親睦会「波の会」主催による北陸石川県の能登半島、金沢への旅行に、作家杉森久英、作家戸部新一郎、和田芳恵、野村尚吾らと共に参加する。	『たった一人の叛乱』丸谷才一
	四月、中山義秀著『中山義秀全集 第九巻』（新潮社刊）に「解 説」を発表。	川端康成が自殺する
	五月、「家出話」を『風 景』に、七月、「落 日」を『農業北海道』に発表。	
	七月八日、「摩周湖」がラジオドラマとして、ＮＨＫラジオ札幌より放送される。	『恍惚の人』有吉佐和子
	九月九日から三日間、和田芳恵、八重樫 實らと共に北海道の層雲峡、十勝温泉方面に旅行、その後札幌、室蘭に立ち寄る。	
	十月三一日、群馬県吾妻郡嬬恋村鹿沢温泉の新鹿沢国民休暇村からまつ荘に、作家中村八朗と静養旅行をする。	「れくいえむ」郷 静子
１９７３年（昭和４８）	六二歳。 一月、「幻日の記」を『月刊自動車労連』に一年間連載する。	「青銅時代」小川国夫
	三月三十日から三日間、「波の会」主催の八丈島観光旅行に、作家榛葉英治、杉森久英、野村尚吾、戸部新一郎、編集者近藤信行らと共に参加する。	「植物祭」富岡多恵子
	五月二六日、天路悠一郎著『遙かなる岩のはざまに』（思潮社刊）詩集の宴が東京都新宿区三光町（現新宿区新宿五丁目）のかに谷地下カルメンで催され、詩人小田久郎らと共に出席、祝辞を述べる。	
	七月、「八丈島」を『小説サンデー毎日』に、九月、原田康子著『輪 唱』（角川文庫）に「解 説」を発表。	『帰らざる夏』加賀乙彦
	十月十四日から三日間、作家城山三郎、八重樫 實らと共に、再び北海道の糠平、十勝川温泉に旅行、その後札幌市で開かれた「北海道新聞文学賞」選考委員会に出席する。	江崎玲於奈ノーベル物理学賞 『挟み撃ち』後藤明生
	十一月、「津軽の十三湖」を『日 旅』に、十二月、「胡 桃」を『文 藝』に発表。	石油危機始まる
１９７４年（昭和４９）	六三歳。 四月、『文學者』通巻二五六号をもって終刊、その終刊号に「終刊に寄せて」を発表。	「椋鳥日記」小沼 丹
	五月、「津軽・十三湖」を『風 景』に発表。	
	七月十四日、札幌市中央区北四条西五丁目の石狩会館（現ＫＫＲホテル札幌）で「室中四八会」卒業四五周年記念総会が開催され出席する。	「接木の台」和田芳恵
	九月、「二つの会」を『文 藝』に発表。 十二日と十三日、北海タイムス社主催「北海道文化講演会」が北海道川上郡標茶町、空知郡奈井江町で開催され、「文学の愉さ」と題した講演旅行を行う。	「あの夕陽」日野啓三 佐藤栄作前首相にノーベル平和賞
	十一月十四日、札幌市から隔月に刊行されている商業的文芸誌『北の話』発行元の凍原社主催、森川勇作著『北国の椅子』（凍原社刊）・八重樫 實著	「土の器」阪田寛夫

	『冬の燕』（凍原社刊）合同出版記念会が札幌市中央区のホテル丸惣で催され出席、発起人代表として挨拶をする。	
１９７５年（昭和５０）	六四歳。 一月、再び『風 景』編集長を一年間担当、編集後記をその間発表。	
	三月、「脱落者の悲哀」を『國文学 解釈と教材の研究』に発表。	
	五月十日、船山 馨文学碑「船山 馨文学碑（お登勢）」が北海道静内郡静内町字田原（現日高郡新ひだか町静内田原）に建立され、その前夜祭、翌日の除幕式に出席する。その後、室蘭、札幌に立ち寄る。 十五日、早稲田大学時代からの友人作家野村尚吾が死去、十七日、その葬儀告別式が東京都目黒区碑文谷四丁目の自宅で執り行われ参列、弔辞を読む。	ベトナム戦争・サイゴン政府降伏 『わが荷風』野口冨士男 「祭の場」林 京子
	七月、「風 祭」を『文 藝』に発表。	
	十月、短篇小説集『摩周湖・海豹 他五編』（旺文社文庫）を旺文社より刊行。上田周二著『闇 ・ 女』（文京書房刊）出版記念会が東京都新宿区新宿三丁目の新宿中村屋本店で催され、詩人西脇順三郎、作家榛葉英治らと共に出席する。	「 岬 」中上健次 『火宅の人』檀 一雄
	十二月十八日から六日間、青森県青森市、龍飛岬など二度目となる津軽地方を旅行する。	
１９７６年（昭和５１）	六五歳。 二月、「霧 笛」を『文 藝』に、三月、「舟橋さんと「風 景」」を『文學界』に発表。	ロッキード疑獄事件判明する
	四月、短篇小説『壊れかかった家』（北の袖珍本第一巻）を室蘭市の袖珍書林より刊行。「海性と山性」を『新 潮』に発表。	「流離譚」安岡章太郎
	六月、「津軽の雪」を『文學界』に発表。 十七日から四日間は札幌市に滞在、その後三日間にわたり、詩人高橋 豊、書家松田青浪と共に、北海道の稚内、浜頓別、網走方面を旅行する。	「限りなく透明に近いブルー」村上 龍
	七月二八日から三日間、故郷室蘭市へ新聞連載小説「海明け」の取材旅行。	『狭山裁判』野間 宏
	八月、「小説におけるいい文章 ― 中山義秀の場合」を『早稲田文学』に発表。短篇小説集『風 祭』を河出書房新社より刊行。	
	十月、東京都町田市在住民により地域文化向上のため結成された「町田ペンの会」に、俳人八幡城太郎に勧められ結成当初から会員になる。（初代会長に作家野田宇太郎、二代目会長に八幡城太郎）	「枯木灘」中上健次
	十一月三日、「青 芝」二三周年記念大会及び八幡城太郎著『まんだらげ』（私家本版）上捧祝賀会が相模原市上鶴間本町三丁目の青柳寺で催され、出席する。	
１９７７年（昭和５２）	六六歳。 一月九日から十月三十日まで、「海明け」を『北海道新聞』日曜版に四三回にわたり連載する。	「金閣炎上」水上 勉
	二月、短篇小説集『風 祭』が「第二八回読売文学賞小説賞」（読売新聞社主催）を受賞する。 十四日、その「第二八回読売文学賞を祝う会」が東京都新宿区新宿の料理屋「母 恋」で、早稲田大学教授村上菊一郎、守屋富生、文芸評論家保昌正夫らが出席して催され、出席する。	
	三月、田中祥三と流氷の海明けを見るために、北海道のウトロ、根室地方へ「海明け」の取材旅行をする。	
	四月十六日、「第一回町田ペン文芸講演会」が町田市原町田三丁目の町田商工会館二階ホールで催され、「文学と私」と題し講演する。	「雀いろの空」和田芳恵
	六月十日、北海道室蘭市の母校「北海道室蘭栄高等学校」創立六十周年記念式典に出席、「若さとは何か」と題し記念講演を行う。	「榧の木祭り」高城修三
	七月、「内なる風景」を『文 藝』に発表。 三日、全国同人雑誌作家協会第三回全国大会が東京都新宿区新宿四丁目の新宿厚生年金会館で開催され出席、「私の創作態度」と題し記念講演を行う。	臼井吉見「事故のてんまつ」プライバシー侵害訴訟
	九月、短篇小説集『 女 』（旺文社文庫）を旺文社より刊行。	『本居宣長』小林秀雄
	十一月、「オホーツクの流氷」を『文學界』に発表。	
	十二月四日、北海道千歳市千代田町三丁目のビートル１０１で、長見義三著『白猿記』（北海道新聞社刊）出版記念会が催され出席する。	『密 会』安倍公房

１９７８年 （昭和５３）	六七歳。 一月、「夕の鐘」を『文 藝』に発表。 四月、長篇小説『海明け』を河出書房新社より刊行。 五月二五日、千歳市で年一回刊行されている市民文芸誌「千歳市民文芸の会」主催、「八木義徳文芸講演会」が千歳市幸町二丁目の千歳信用組合本店(現北央信用組合千歳支店）会議室で催され、「北方的なもの」と題し講演する。 六月、「第三次早稲田文学復刊」を『早稲田文學』に、七月、「日本人の死生観」を『新 潮』に発表。 八月、全国同人雑誌作家協会主催による「全国同人雑誌文学賞」が創設され第一回より選考委員を務める。（選考委員に丹羽文雄、文芸評論家久保田正文、 後に文芸評論家大河内昭爾） 十月、随筆集『男の居場所』を北海道新聞社より刊行。 五日、作家和田芳恵の一周忌を偲ぶ「和田芳恵さんを偲ぶ会」が東京都港区新橋一丁目の第一ホテル東京で百七十名余が出席して催され出席、スピーチを述べる。 十一月、俳句誌『青 芝』発刊二五周年記念及び八幡城太郎句碑除幕式祝賀会が、神奈川県相模原市上鶴間本町三丁目の千寿閣で催され、詩人田中冬二、文芸評論家福田清人、野田宇太郎らと共に出席する。 十二月二三日から三日間、『海明け』をテレビドラマ化するテレビ朝日「流氷の詩」のロケーションが室蘭市で行われ、俳優北大路欣也、女優松原智恵子、女優藤 真利子らを迎え、ともに参加する。	『 夏 』中村真一郎 成田空港が正式に開港する 「夕暮まで」吉行淳之介 「寵 児」津島佑子 日中平和友好条約が締結 「麦熟る日に」中野孝二 「徳田秋声の文学」野口冨士男
１９７９年 （昭和５４）	六八歳。 一月、「一頁時評」を『文 藝』に一年間連載する。「落ち葉」を『新潮』に、「風 車」を『 海 』に発表。 二五日から三月二九日まで毎週木曜日、テレビ朝日系列で「流氷の詩」が十週連続で放映される。 四月七日、「宮 林太郎を励ます会―日本の幻滅・出版記念パーティー―」が東京都目黒区下目黒一丁目の目黒雅叙園で催され、出席する。 五月、「春の泥」を『新 潮』に発表。 六月十六日、北海道虻田郡虻田町字洞爺湖温泉町（現洞爺湖町洞爺湖温泉）の眺湖荘で「室中四八会」卒業五十周年記念総会が開催され出席する。 七月、「その男」を『 海 』に発表。 八月、「二つの暮らし」を『文藝春秋』に発表。 十八日、ＮＨＫＦＭラジオの「ラジオ劇場」で、小説「 女 」を原作にした「はるかなるわがアイン」が放送される。 九月四日から二週間の旅程で、作家北條紫陽、詩人高橋敏彦らと共に、初めてイギリス、スペイン、フランス、スイス、イタリア、ギリシャ六カ国へ外国旅行をする。 十月、「一枚の繪」を『文 藝』に、十一月、和田芳恵著『暗い流れ』（集英社文庫）に解説を、十二月、「一点の灯」を『歴史と人物』に発表。	「神の汚れた手」曽野綾子 第五回主要先進国会議（東京サミット）開催される 『みちのくの人形たち』深沢七郎 『同時代ゲーム』大江健三郎
１９８０年 （昭和５５）	六九歳。 一月、「色紙と硯」を『新 潮』に、「吹 雪」を『 海 』に発表。 三月、随筆集『北風の言葉』を北洋社より刊行。「八ヶ岳」を『文 藝』に発表。 四月九日、詩人田中冬二が死去、二九日、その詩碑除幕式及び追悼会が相模原市上鶴間本町の千寿閣で催され、福田清人、野田宇太郎らと共に出席する。 五月、限定豪華本、短篇小説集『劉廣福』を成瀬書房より刊行。 六月二九日、室蘭青年会議所主催「室蘭青年会議所創立二五周年記念八木義徳記念講演」が室蘭市中島町三丁目の室蘭パレスホテルで催され、「人生の可能性」と題し記念講演する。 七月、「風 景」を『文學界』に、九月、「傘 寿」を『 海 』に発表。 十月、室蘭市で年一回刊行されている市民文芸誌、室蘭文藝協会刊『室蘭市民文芸　１４号』が「特集・八木義徳」号として刊行され、それに「七十歳の弁」を発表、また文芸評論家小松伸六、詩人更科源蔵ら十四名が寄稿する。 十一月、「風 鈴」を『新 潮』に発表。 六日、故郷北海道室蘭市清水町一丁目の測量山中腹に「八木義徳文学碑」が建立されその除幕式に夫妻で出席する。その碑文には、小説「海明け」の一節が引用された。 翌日、北海道放送テレビ「ふるさと人間記」撮影のロケーションに参加する。	『帰 路』立原正秋 『日本の現代小説』篠田一士 「コーマルタン界隈」山田 稔 「四畳半襖ノ下張」最高裁で野坂昭如らに有罪判決 「春の道標」黒井千次

	十二月九日、札幌市の凍原社が発行している『北の話』刊行百号記念講演会が札幌市中央区大通西三丁目の北海道新聞社大通館で開催され原田康子と共に出席、「私の小説観」と題し記念講演を行う。	
１９８１年（昭和５６）	七十歳。 一月、「故郷小景」を『文 藝』に発表。	「荻窪風土記」井伏鱒二
	三月、短篇小説集『一枚の繪』を河出書房新社より刊行。	
	五月、「系 図」を『 海 』に、「伊豆木の里」を『作 品』に発表。	「白夜を旅する人々」三浦哲郎
	七月、「夜明けの眠り」を『文學界』に発表。 四日から二日間にわたり、山梨県南巨摩郡増穂町最勝寺の日蓮宗本浄寺で、作家多田裕計の一周忌法要と追悼句会が催され出席する。	
	八月五日、船山 馨・春子夫妻が同日相次ぎ死去、東京都新宿区中井二丁目の自宅に弔問する。七日に東京都中野区上高田一丁目の龍興寺で葬儀、告別式が執り行われ参列、弔辞を読む。	『吉里吉里人』井上ひさし
	九月、「漂 雲」を『文 藝』に発表。 毎週土曜日に社会人のため、東京都新宿区本塩町祥平館ビル内で開講されていた文芸講座の「講談社フェーマス・スクールズ四谷学院」一般講座文芸部門<小説作法>の講師になる。 二四日、小学生時代からの友人増岡重治が死去、その葬儀、告別式が北海道室蘭市沢町の大正寺で執り行われ参列、弔辞を読む。	
	十月二十日、北海道放送テレビ「パック ２」の中で、「ふるさと人間記・海と山と少年と ― 八木義徳 ―」が放映される。	北炭夕張新鉱でガス突出事故、死者９３名の惨事
	十一月十三日、伊藤 整の十三回忌によせた、故人を偲ぶ「雪明りの会」が東京都港区新橋の第一ホテル東京で催され出席する。	『本覚坊遺文』井上 靖
	十二月十四日、室蘭中学校同窓会「四八会」の「東京四八会」が東京都内で十一名が参加し催され、出席する。	
１９８２年（昭和５７）	七一歳。 一月、「帰 郷」を、三月、「北へ往く」を、五月、「時計台」を『新 潮』に発表。	「夏の栞」佐多稲子
	六月二七日、上田周二著『詩人 乾 直恵 ― 詩と青春』（潮流社刊）出版祝賀記念会が東京都新宿区の新宿東陽会館で開かれ、出席する。	東北新幹線が開業する
	七月、「羽根のように」を『新 潮』に発表。 二三日、出身地北海道室蘭市の室蘭港開港百十年・市制施行六十周年記念「室蘭市栄誉賞」を受賞、その記念式典、受賞式が室蘭市幸町の室蘭市文化センターで催され夫妻で出席する。	
	八月、「紫竹と梅の花」を『文 藝』に、九月、「逃亡の時」を『新 潮』に発表。	『裏声で歌え君が代』丸谷才一
	十一月、「北満の落日」を『新 潮』に発表。 十一月十九日、中学生時代「四八会」の友人中山勝美が死去、二一日、その葬儀告別式が東京都練馬区大泉学園町の自宅で執り行われ参列、弔辞を読む。	上越新幹線が開業する 「佐川君からの手紙」唐 十郎
	十二月十一日から二六日まで、東京都豊島区南池袋一丁目西武百貨店池袋本店内にある西武美術館（後セゾン美術館と改称、その後閉館）で「歿後三五年・横光利一展」が開催され、十四日、作家中村真一郎と共に記念講演を行う。	
１９８３年（昭和５８）	七二歳。 一月、「熱い季節」を『新 潮』に発表。「名文鑑賞」を『月刊自動車労連』（後、八六年一月より『ＪＷＡ』と改題）に六年間にわたり連載する。『神奈川新聞』の「週 言」に、随筆を毎月一回、十一回にわたり連載する。	『家 族』山口 瞳
	三月、「師 弟」を『文學界』に、「音楽の鳴るとき」を『新 潮』に発表。 三一日に作家尾崎一雄が死去、四月三日にその葬場祭が神奈川県小田原市曽我谷津の宗我神社の境内で執り行われ参列する。	『 槿（あさがお） 』古井由吉
	四月、「講談社フェーマス・スクールズ四谷学院」一般講座文芸部門<小説作法>の「八木教室」講師を、以後七年間にわたり務める。	
	五月、「遠い地平」を『新 潮』に、九月、「老いの日常」を『文 藝』に発表。	『いつもとおなじ春』辻井 喬
	十月二八日から三日間、室蘭文学館設立期成会主催「八木義徳と北海道芥川賞作家展」が室蘭市東町二丁目の室蘭ファミリーデパート桐屋（現ポスフール室蘭）で開催され、初版本・自筆原稿等、約四百点が展示される。	大韓航空機がソ連領内に入り撃墜される
	十一月、「街あるき」を『海 燕』に発表。 短篇小説集『遠い地平』を新潮社より刊行。 二六日、『遠い地平』刊行を祝い、二水会主催「八木さんを囲む会」	

	が東京都港区新橋一丁目の航空会館で催され、出席する。 十二月三日、「第六回町田ペン文芸講演会」が町田市森野二丁目の町田市民ホールで催され、「文学と私」と題し講演する。	「光抱く友よ」高樹のぶ子
１９８４年 （昭和５９）	七三歳。 一月、「土堤下の家」を『文學界』に発表。 二八日、志津友の会主催、やまがた散歩社後援文芸講演会が山形県山形市小白川町二丁目のオーヌマホテルで開催され、「風土と文学」と題し講演する。 四月、室蘭市で、地元出身の芥川賞作家・八木義徳の人となりに迫ろうと「八木義徳を読む会」（代表・樋口游魚）が発会、活動をスタートさせる。 五月、短篇小説集『漂 雲』を河出書房新社より刊行。 七月、「水の輪」を『新 潮』に発表。 随筆集『まちがえた誕生日』を花曜社より刊行。 九月十四日から十六日まで、室蘭文学館設立期成会主催「八木義徳と坂東三百文学展」が室蘭市中央町三丁目の長崎屋室蘭中央店で開催され、初版本・文芸雑誌・自筆原稿等約四百点が展示される。 十二月、「河 口」を『文學界』に発表。	日本ペンクラブ主催、東京で二回目の「国際ペン大会」 「夢遊大国のための音楽」島田雅彦 「冷い夏、熱い夏」吉村 昭 「方船さくら丸」安倍公房
１９８５年 （昭和６０）	七四歳。 六月三十日、神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目の峰本本店で、座談会「横光利一を語る会」が催され、俳人石塚友二、俳人清水基吉らと共に出席する。 九月、八木義徳に関する評論集『八木義徳』（かたりべ叢書５）が宮本企画より刊行される。 十月、「家族のいる風景」を『海 燕』に発表。 五日、室蘭文芸協会、室中同窓会白鳥会主催文芸講演会が室蘭市東町四丁目の胆振地方婦人会館で開催され、「私の文学と人生」と題し講演、翌六日、「八木義徳文学碑」顕彰祭が室蘭市清水町測量山中腹の文学碑前で行われ出席する。 十一月三日、俳誌「青 芝」三二周年記念大会（八幡城太郎先生追悼俳句会大会）が相模原市上鶴間三丁目の青柳寺で催され出席する。 十二月、短篇小説集『家族のいる風景』を福武書店より刊行。	「路上の人」堀田善衛 「夢の島」日野啓三 日航ジャンボ機墜落、史上最大の死者となる 山田詠美「ベットタイムアイズ」
１９８６年 （昭和６１）	七五歳。 一月、「遺 品」を『新 潮』に、三月、「命三つ」を『文學界』に発表。 五月、日本文藝家協会の理事に、再度選任される。 六月十一日から二日間、戦友会である衝陽会総会が長野県小諸市大字菱平の菱野温泉で催され、出席する。 九月、「花 火」を『新 潮』に発表。 十月、土合弘光編・著『心には北方の憂愁 ― 八木義徳書誌 ― 』が八木義徳の故郷北海道室蘭市の愛読者「八木義徳書誌刊行会」より刊行される。 同月十七日、室蘭市東町の胆振地方婦人会館で「胆振地方婦人会館文化祭」が催され、「読むこと書くこと」と題し記念講演を行う。 また同夜、室蘭市中央町の室蘭プリンスホテルで「八木義徳書誌刊行祝賀会」が催され、翌十八日には室蘭市入江町の入江臨海公園内に「葉山嘉樹文学碑」が建立され、その除幕式にそれぞれ出席する。	ソ連、チェルノブイリ原子力発電所で大規模事故発生 『感触的昭和文壇史』野口冨士男 『アマノン国往還記』倉橋由美子 『天井から降る哀しい音』耕 治人
１９８７年 （昭和６２）	七六歳。 一月、「海の文学碑」を『海 燕』に発表。 三月、短篇小説集『命三つ』を福武書店より刊行。 十月、「夕 虹」を『海 燕』に発表。 同月三日から八九年九月三十日まで、「八木義徳のひとりごと」を『北海道新聞』毎週土曜日夕刊に九八回にわたり連載。 十一月一日、前月十六日より鳥取県の三会場で開かれていた「本の国体ブックインとっとり'８７ 日本の出版文化展」の行事、「<作家を囲んでのシンポジウム>紅の大山で文学のひととき」が鳥取県西伯郡大山町大山の大山観光ホテル白雲荘でシンポジウムが開かれ、作家野口冨士男、作家吉村 昭らと共に参加する。 五日、作家・故川崎長太郎の三回忌に寄せた「川崎長太郎さんを偲ぶ会」が東京都中央区銀座八丁目の資生堂パーラー銀座本店で催され、作家水上 勉、	「狂人日記」色川武大 『サラダ記念日』俵 万智 国鉄が分割民営化になる 『ノルウェイーの森』村上春樹 ニューヨーク株式市場が大暴落（ブラックマンデー） 『懐かしい年への手紙』

	作家渋川 驍らと共に出席する。 二十日、同人雑誌『文學者』の関係者の会である「龍の会」の祝宴が、同誌の主宰者であった丹羽文雄夫妻を招いて東京都港区新橋の第一ホテル東京で開かれ、出席する。 十二月二日、文藝春秋主催「文藝春秋創業六五周年・菊池 寛生誕百年記念」の催しが、東京都港区虎ノ門二丁目のホテルオークラ東京で開かれ出席する。	大江健三郎 「キッチン」吉本ばなな
１９８８年 （昭和６３）	七七歳。 一月、「赤い達磨」を『海 燕』に発表。 十日から三一日まで、ＮＨＫラジオの日曜名作座で『家族のいる風景』が、四週連続して放送される。 三月、「夢三態」を『文學界』に発表。 四月十日、神奈川県小田原市本町一丁目の小田原市市民会館で、尾崎一雄、川崎長太郎両氏を偲ぶ文芸講演会が開かれ、「尾崎一雄・人と作品」と題し講演する。講演後、尾崎一雄の五年祭を記念して「故人とその文学を偲ぶ集い」が、小田原市国府津三丁目の、故人ゆかりの国府津館で催され出席する。 同月十九日、矢野晶子著『カルメンお美』（有隣堂刊） 出版記念会が神奈川県横浜市西区南幸一丁目の横浜東急ホテルで催され出席、祝辞を述べる。 六月六日、「第四十四回日本芸術院賞 恩賜賞」を受賞する。 十日、その受賞祝賀会が室蘭市中央町の室蘭プリンスホテルで、野口冨士男、原田康子らが出席して催され、夫妻で出席する。 十七日、ＮＨＫ教育テレビ「文化ジャーナル」の対談番組に出演する。 七月十七日、ＮＨＫ教育テレビ「日曜美術館 北海道・大自然の肖像 画家・木田金次郎」の解説者として出演する。 十月二一日、室蘭市海岸町三丁目に、全国でも珍しい官民併立方式で地元出身の芥川賞作家である八木義徳を中心とした「市立室蘭図書館附属文学資料館」、愛称「港の文学館」（現室蘭市港の文学館）が開館し、その開館式に、また同夜、その開館祝賀会と室蘭文藝協会主催「八木義徳文学祭」が同市宮の森町一丁目の中嶋神社蓬峡殿で催され、それぞれに出席する。 十一月、短篇小説集『家族のいる風景』（福武文庫）を福武書店より刊行。 同月五日、「北海道に根ざした長年の文学活動」とし、「第四二回 北海道新聞文化賞 社会文化賞」を受賞、その贈呈式、祝賀会が札幌市中央区北一条西四丁目の札幌グランドホテルで催され、夫妻で出席する。 同月六日、NHKラジオ第二放送で、「自作を語る・書き続けた歳月『風 祭』八木義徳」が放送される。また平成十一年十二月二六日、NHKラジオ第一放送「ラジオ深夜便」の中で再放送される。（放送は翌日の深夜午前一時）	「そうかもしれない」耕 治人 青函トンネル開通、営業開始 リクルート事件発覚、一大汚職事件となる 『尋ね人の時間』新井 満 「由 熙」李 良枝
１９８９年 （昭和６４・平成元年）	七八歳。 一月、「陽だまり」を『海 燕』に発表。 二月、短篇小説集『夕 虹』を福武書店より刊行。 四日、国立教育会館主催「第六回 日本芸術院賞受賞者特別講演会」が東京都千代田区霞が関三丁目の国立教育会館で催され、「私と文学 - 私の歩んだ道 - 」と題し講演する。 三月、「異 物」を『文學界』に発表。 足掛け二三年間、非常勤講師として勤めた文京女子短期大学を退任する。 七月一日、「町田ペンの会文化講座」が町田市森野の町田市民ホールで催され、「人間の絆について」と題し講演する。 十月、短篇小説集『風 祭』<大活字本シリーズ.>を埼玉福祉会より刊行。 十一月三日、平成元年度秋の叙勲で「勲三等瑞宝章」を受章する。 同月二十日、「日本芸術院会員<第二部>」の新会員に内定し、十二月十五日付で文部大臣より発令された。 三十日、二水会主催「叙勲及び芸術院新会員祝賀会」が横浜市鶴見区の寿楽で催され、出席する。 十二月十二日、「芥川賞１００回記念講座 芥川賞の作家たち」の講師として、「戦前の芥川賞 ～陣中に受賞して～ 」と題し講演する。	一月七日、昭和天皇御逝去。元号は平成となる。 「さして重要でない一日」伊井直行 中国で天安門事件発生する 東西ベルリンを遮断していたベルリンの壁が崩壊する 「表層生活」大岡 信
１９９０年 （平成 ２）	七九歳。 一月、「浮 巣」を『海 燕』に発表。 三一日、「室蘭市名誉市民」にに選ばれ、その顕彰式、祝賀会が室蘭市宮の森町の中嶋神社蓬峡殿で催され、夫妻で出席する。 二月三日、ＮＨＫテレビ北海道「北海道ワイド・ 土曜インタビュー」の中で、	『志賀直哉』本多秋五 「彼岸先生」島田雅彦

	「作家・八木義徳氏故郷へ」が放映される。 十四日、北海道小樽市主催「第十七回小樽市民大学講座」が小樽市稲穂二丁目の小樽日専連ビルで開講され、「風土文学学」と題し、講演する。 三月、足掛け九年間にわたり講師を勤めた「講談社フェーマス・スクールズ四谷学院」を退任する。 初めての個人全集『八木義徳全集・全八巻』が福武書店より刊行始まる（十月に完結）。 三日、「横浜市図書館文化講演会」が横浜市中区本町の横浜市開港記念会館で催され、「横浜と私」と題し講演する。 五月、作家・伊藤 整の功績をたたえようと、ゆかりの地北海道小樽市で伊藤整文学賞の会主催「伊藤 整文学賞」が創設され、その選考委員となる（選考委員に井上 靖、安岡章太郎、黒井千次、大庭みな子、菅野昭正、高橋英夫）。同月十五日、東京都町田市主催「１９９０（平成２）年度 ことぶき大学」が開講し、その開講式記念講演会が町田市森野二丁目の町田市民ホールで開かれ、「私と小説」と題し、講演する。 六月十日、「二水会の集い」が横浜市鶴見区上末吉二丁目の末吉地区センターで催され出席する。 十一月二九日、二水会の忘年会が横浜市鶴見区豊岡町のみや川で催され、出席する。 十二月六日、「純文学四十有余年、私小説の精髄をひたむきに追求し、独自の境地を守りぬいた」とし、日本文学振興会主催「第三八回 菊池 寛賞」を受賞その贈呈式、祝賀会が東京都港区虎ノ門のホテルオークラ東京で催され出席、受賞の言葉を述べる。	死刑囚永山則夫、入会拒否問題で文芸家協会紛糾する 「村の名前」辻原 登 「妊娠カレンダー」小川洋子
１９９１年（平成 3）	八〇歳。 一月、「小説家の姿勢」（作家三浦哲郎との対談）を『海 燕』に発表。四日から十三日まで「文学・わが内なる世界」（作家三浦清宏との対談）を『室蘭民報』朝刊に十回にわたり連載する。 二九日、作家井上 靖が死去、翌月一日、東京都世田谷区桜三丁目の自宅で密葬が執り行われ、弔問する。 二月一日、文芸評論家武田友寿が死去、三日、その通夜が東京都府中市多磨町二丁目の多磨葬祭場日華斎場で執り行われ参列する。 二四日、フランス文学者で恩師の吉江喬松を偲ぶ「孤雁没後五十年記念講演会」が出身地長野県塩尻市大門七番町の塩尻市総合文化センター講堂で催され、「吉江喬松先生の思い出」と題し講演する。 四月、「傘寿の弁」を『別冊文藝春秋』に発表。 六月二一日、佐伯一麦著『ア・ルース・ボーイ』（新潮社刊）が新潮社主催「三島由紀夫賞」を受賞、その受賞贈呈式、祝賀会が東京都港区虎ノ門のホテルオークラ東京で催され、出席する。 二三日、室蘭ルネッサンス主催「ルネッサンス大学 芥川賞作家八木義徳・三浦清宏両先生を囲む講演会」が室蘭市中央町の室蘭プリンスホテルで開催され、「文学するこころ」と題し講演する。 八月二五日、半商業的同人雑誌『文藝時代』創刊以来の友人、作家芝木好子が死去、二七日、その葬儀告別式が東京都新宿区南元町の一行院千日谷会堂で執り行われ参列、弔辞を読む。 二九日、同人雑誌『作 家』主宰の小谷 剛が死去、三一日、その葬儀告別式が名古屋市中川区石場町４丁目の自宅で執り行われ参列、弔辞を読む。 十月、随筆集『文学の鬼を志望す』を福武書店より刊行。 五日、二水会主催「傘寿を祝う会」が横浜市中区南仲通四丁目の福久で催され出席する。 六日、ＮＨＫ衛星第二テレビ「週刊ブックレビュー」の中、「早稲田文学百年」でインタビューを受け、それが放映される。 十一月、「女ともだち」を『新 潮』に発表。 十日、小田原市早川の早川観音真福寺境内に「川崎長太郎文学碑」が建立され、その除幕式に出席し祝辞を述べる。 三十日、全道庁文芸誌『赤煉瓦』三十号発刊記念「赤煉瓦とその周辺展 講演会」が札幌市中央区北二条西七丁目のかでる２・７で催され「私と文学」と題し講演する。また同夜、「赤煉瓦とその周辺展 記念の夕べ」が同市中央区北三条西七丁目のフジヤサンタスホテルで催され出席する。	アメリカがイラクを空爆、湾岸戦争勃発 「親指Pの修行時代」松浦理英子 「背負い水」荻野アンナ 『立原正秋』高井有一 ソビエト連邦が解体、崩壊する
１９９２年	八一歳。 二月、「真珠湾五十周年」を『文學界』に発表。	『男流文学論』上野千鶴子、

（平成 ４）	三月二五日、「早稲田大学芸術功労者」として、東京都新宿区西早稲田一丁目の早稲田大学記念会堂で行われた同大学一九九一年度卒業式の中で表彰される（作家・井伏鱒二、俳優・森繁久彌、作家・丹羽文雄に次いで四人目）。二五日から四月三日まで、その早稲田大学図書館主催「早稲田大学芸術功労者表彰記念　八木義徳展」が早稲田大学総合学術情報センター（二階）展示室で開催され、八木文学の軌跡を著作・原稿・写真でたどる資料が展示される。 三月二八日、母八木セイが東京都町田市野津田町の社会福祉法人福音会「特別養護老人ホーム 福音の家」で死去、享年一〇二歳。三十日、同所にて見送りの会が、また四月四日、東京都中野区上高田一丁目の松源寺で、近親者のみで告別式が執り行われた。 九月二六日、北海道紋別郡生田原町字生田原（現紋別郡遠軽町生田原）の生田原川河川敷地に「オホーツク文学碑公園」が完成、小説「風 景」の一節が刻まれた「八木義徳小説碑」が建立される。 十月十七日、大田倭子著『時を彩る』（審美社刊）出版記念会が横浜市西区南幸の横浜東急ホテルで催され、作家豊田 穣、文芸評論家進藤純孝らと共に出席、祝辞を述べる。 十一月十五日、故伊藤 整の二三回忌を迎え、故人を偲ぶ「雪明りの会」が東京都新宿区新宿五丁目の東京大飯店で催され、野口冨士男、作家大庭みな子、文芸評論家本多秋五、久保田正文らと共に出席する。 二一日、小林勇著『なければなくても別にかまいません』（自然社刊）出版記念会が神奈川県川崎市高津区溝口四丁目の亀谷会館で催され出席、祝辞を述べる。	小倉千加子、富岡多恵子 「運転手」藤原智美 「PKO法案」が成立する 「田園風景」坂上 弘 「ねじまき鳥クロニクル」村上春樹
１ ９ ９ ３ 年 （平成 ５）	八二歳。 一月、「老頭漫語」を『文學界』に発表。 二月、室蘭市海岸町の市立室蘭図書館附属文学資料館「港の文学館」に芥川龍之介賞正賞の「すずり」をはじめ、文学・文化賞の記念品約四十点、生原稿等の文学資料、また蔵書約二〇〇〇冊を寄贈する。 二七日、テレビ北海道の対談番組「揆一郎の人名録 「私の原風景・室蘭」 八木義徳」で作家高橋揆一郎と対談、それが放映される。 五月二七日、ＮＨＫテレビ「ナイトジャーナル　物書きで食べていけるか？安原 顕の文学談義」に出演する。 六月十八日、「第四回伊藤 整文学賞」受賞式が小樽市稲穂一丁目の小樽グランドホテルで催され、黒井千次、高橋英夫らと共に出席する。 二七日、故船山 馨の十三回忌を迎え、「船山 馨を偲ぶ会」が東京都渋谷区神宮前六丁目の南国酒家原宿店本館で催され、作家青山光二、作家渡辺淳一、彫刻家佐藤忠良らと共に出席する。 七月十八日、埼玉県草加市の「草加ペンクラブ」定例総会が同市住吉二丁目の草加市中央公民館で開催され出席、その記念講演会で「文学雑感」と題し講演する。 八月三日から十一月二七日まで、港の文学館開館五周年記念「八木義徳文学展～文学６０年のあゆみ～」が室蘭市海岸町の同館で開催され、三日、そのオープン・テープカット式に出席する。また翌四日、その記念文芸講演会が同市入江町のホテルセピアス（現ホテルセピアス花壇）で催され、「文学的半生を語る」と題し講演する。 十月、短篇小説集『漂 雲』<大活字本シリーズ.>を埼玉福祉会より刊行。 十一月二十日、豊田 穣著『豊田 穣文学/戦記全集　全二十巻』（光人社刊）の完結を祝う会が、横浜市西区みなとみらい二丁目の横浜ランドマークタワー中国家庭料理店墨花居で催され、豊田 穣夫妻、進藤純孝らと共に出席する。同月二二日、『文藝時代』以来の友人作家野口冨士男が死去、二七日、その葬儀告別式が東京都文京区大塚五丁目の護国寺桂昌殿執り行われ参列、弔辞を読む。 二八日、長見義三著「長見義三氏　恒文社「作品集」（全三冊）・響文社「姫 鱒」出版記念会」が千歳市千代田町のびーとる１０１で催され出席する。	『女ざかり』丸谷才一 「寂寥郊野」吉目木晴彦 細川護熙を首班とする連立政権が発足する 差別表現をめぐり、筒井康隆が断筆宣言をする 「石の来歴」奥泉 光
１ ９ ９ ４ 年	八三歳。 一月、「冬の夕陽」を『新 潮』に発表。 随筆集『何年ぶりかの朝	

（平成 ６）	八木義徳自選随筆集』を北海道新聞社より刊行。 二月、「落日望景 - 野口冨士男を悼む」を『新 潮』に発表。 三月三十日、去る一月三十日に亡くなった作家「豊田 穣氏を偲ぶ会」が東京都千代田区一ツ橋二丁目の如水会館で催され出席、献杯の音頭をとる。 四月二一日、早稲田大学時代以来の友人作家長見義三が死去、二二日、その前夜祭が、また二三日に告別式が千歳市北斗一丁目の橋爪斉苑で執り行われ参列、弔辞を読む。 五月十七日、「日本文藝家協会　第四八回（平成六年度）定時総会」が東京都千代田区丸の内三丁目の東京會舘で開催され、名誉会員に推挙される。 九月、長篇小説『海明け㊤㊥㊦』<大活字本シリーズ>全三巻を埼玉福祉会より刊行。 十四日、編集者で福武書店取締役の寺田 博が同社を退社、その「寺田 博さんをねぎらう会」が東京都千代田区紀尾井町のホテルニューオータニ東京で催され、作家小島信夫、水上 勉らと共に出席、スピーチを述べる。 十月二六日、故野口冨士男の文学資料を展示した「野口冨士男文庫」が、ゆかりの地埼玉県越谷市東越谷四丁目の越谷市立図書館内に開設され、その開設記念式典に出席、祝辞を述べる。 十一月二一日から十日間、今夏の暑さの疲れと風邪で体力が衰え、町田市原町田六丁目の原町田医院に入院する。	「おどくでく」室井光広 自社さによる村山富市連立政権が成立 「百年の旅人たち」李 恢成 関西国際空港が開港する 「石に泳ぐ魚」柳 美里 大江健三郎がノーベル文学賞を受賞
１ ９ ９ ５ 年 （平成 ７）	八四歳。 一月、「野口冨士男文庫のこと」を『ノーサイド』に発表。 二月十三日、前立腺肥大手術のため神奈川県相模原市北里一丁目の北里大学病院に入院、十五日に手術が行われ、二四日に退院する。 四月十五日、「作家・宮 林太郎さんを励ます会」が東京都渋谷区渋谷二丁目の東急文化会館東急ゴールデンホール（０３年閉鎖・解体される）で催され出席、祝辞を述べる。 五月十一日、「第六回 伊藤 整文学賞」選考委員会が東京都中央区銀座七丁目の本店浜作で開かれ出席、今回で選考委員を辞任する。 十月二九日、随筆集『何年ぶりの朝　八木義徳自選随筆集』（北海道新聞社刊）がブックインとっとり実行委員会主催「第八回 地方出版文化功労賞　特別賞」を受賞する。 十一月二一日、故野口冨士男三回忌を迎え、「野口冨士男を偲ぶ会」が東京都千代田区丸の内の東京會舘で催され、青山光二、江藤 淳らと共に出席する。	阪神淡路大震災起きる 「このひとの閾」保坂和志 オウム真理教による地下鉄サリン事件起きる 「亡命者」高橋たか子 『西行花伝』辻 邦生
１ ９ ９ ６ 年 （平成 ８）	八五歳。 十一月、「近代俳句・この一句　多田裕計」を『新 潮』に発表。 八日、北海道新聞社主催「第三十回 北海道新聞文学賞」受賞式が札幌市中央区の札幌グランドホテルで催され出席、今回で選考委員を辞任する。十五日、NHKラジオ北海道放送「北の名作」で「雪の夜の記憶」が朗読、放送される。 十二月六日、かわさき文学賞の会主催「第四十回 かわさき文学賞コンクール」表彰式が神奈川県川崎市中原区新丸子東三丁目の川崎市中小企業・婦人会館で催され出席、今回で四十年間務めた選考委員を辞任する。	薬害エイズ事件、和解が成立 「 花 渦」高樹のぶ子 「蛇を踏む」川上弘美 『蕁麻の家』萩原葉子 ペルー日本大使館占拠事件
１ ９ ９ ７ 年 （平成 ９）	八六歳。 四月、室蘭文学館の会編『港の文学館叢書第一巻　八木義徳書誌』が室蘭文学館の会より刊行される。 八月、「夢と原風景」を『北の話』に発表。体調不良が続いていることから静岡県裾野市須山十里木の義弟の山荘に、約二週間にわたり夫妻で滞在し、静養する。	「座談会昭和文学史」井上ひさし他 神戸児童連続殺傷事件発生 「日本文学盛衰史」高橋源一郎 地球温暖化防止京都議定書採択
１ ９ ９ ８ 年 （平成 １０）	八七歳。 六月二日から十月三一日まで、室蘭市海岸町の市立室蘭図書館附属文学資料館「港の文学館」で、同館開館十周年記念「八木義徳・三浦清宏文学展」が開催される。 七月、低血圧やめまい等の検査治療のため、町田市原町田の原町田医院に約四ヵ月間にわたり入院、闘病生活を送る。 十月三一日から十一月二六日まで、越谷市東越谷の越谷市立図書館内	冬季オリンピック長野大会開催 「日 蝕」平野啓一郎

	野口冨士男文庫で「野口冨士男と八木義徳展」が開催される。十一月十三日、その記念野口冨士男文庫講演会が催され、「野口冨士男を語る」と題し、越谷市立図書館製作ビデオ放映の解説をする。	「幻 燈」岩橋邦枝
１９９９年（平成１１）	八八歳。 一月、名文鑑賞文集『文章教室』を作品社より刊行。 七月、起立性低血圧のため、町田市下小山田町の多摩丘陵病院に入院、再度闘病生活を送る。 八月、入院生活の間、同じ町田市内の木曽町一八七番一 木曽森野第一アパートＢ～１～６０１号に転居する。 十月二十一日、室蘭市海岸町の市立室蘭図書館附属文学資料館「港の文学館」に「八木義徳記念室」が新設され、生原稿、文学資料等約五百点が展示される。 十一月九日午後四時二七分、肺炎のため入院先の多摩丘陵病院で永眠、享年八八歳。 十四日、午後六時より通夜、十五日、午前十時より告別式が東京都町田市上小山田町の南多摩斎場で、無宗教で執り行われる。 （葬儀委員長 吉村 昭、司 会 佐伯一麦。作家三浦哲郎、文芸評論家高橋英夫らが弔辞を読む。） 十二月十七日、出身地北海道室蘭市主催の「室蘭市葬」が、室蘭市入江町のホテルセピアス花壇で執り行われ、八木正子未亡人が参列する。 同月二五日、菩提寺である東京都中野区上高田の松源寺に納骨される。 戒名は「景雲院随心義徳居士位」。	プライバシー侵害訴訟で柳 美里「石に泳ぐ魚」出版差止め判決 「国旗・国歌法」が成立する 「瑠璃色の石」津村節子 「海の底から、地の底から」金 石範 「蔭の棲みか」玄月
２０００年（平成１２）	一月、短篇小説集『われは蝸牛に似て』が作品社より刊行される。「追 悼 “文学の鬼” 八木義徳」が『文學界』で編まれ、吉村 昭、原田康子、作家堀江敏幸、作家坪内祐三が追悼文を寄せる。 二月、札幌市で刊行されている同人誌『人間像』１５７号が「追 悼・八木（義徳）さん」として編み、平木國夫ら十名の同人が追悼文を寄せる。 三月、『室蘭文藝』３３号が八木義徳追悼号として編み、樋口游魚ら十名が追悼文を寄せる。 七月、町田ペンの会報『町田ペン』９２号が「特集・八木義徳とわたし」として編み、上田周二ら五名が追悼文を寄せる。 五日、ＮＨＫラジオ放送「ラジオ深夜便」（放送は翌日午前一時）の中の「ラジオ深夜便小劇場」で、「 釘 」がラジオドラマとして、中村メイコ、加藤健一出演で放送される。 八月、短篇小説集『私のソーニャ・風 祭 八木義徳名作選』<講談社文芸文庫>が講談社より刊行される。 十一月九日、故八木義徳一周忌を迎え、室蘭市中島町二丁目のホテルサンルート室蘭で「蝸牛忌」が、また東京都中野区中野四丁目の中野サンプラザレストラン サン ヴァンテアン ダイニングで「風祭忌」と、それぞれ小説にちなんで名付けた一周忌法要が催される。	「各務原」小島信夫 南北朝鮮、南北共同宣言に調印 「花腐し」松浦寿輝 「生者へ」丸山健二 白川秀樹ノーベル化学賞受賞 「聖 水」青来有一
２００１年（平成１３）	三月、『室蘭文藝』３４号が「特集 八木義徳を語る」として編み、作家清水基吉、三浦清宏、文芸評論家保昌正夫、装丁家田村義也ら三一名が追悼文を寄せる。また、吉村 昭ら四八名が八木義徳アンケートに回答を寄せる。 七月三一日から十月二六日まで、「八木義徳生誕９０年 素顔の八木義徳写真展」が室蘭市海岸町の市立室蘭図書館附属文学資料館「港の文学館」で開催される。 十月二十一日、「八木義徳先生生誕９０年 室蘭文芸協会創立３０周年 蝸牛祭」が室蘭市中島町のホテルサンルート室蘭で催され、八木正子未亡人が出席する。また、室蘭市教育委員会主催「八木義徳自由作文賞」が制定され、その第一回贈呈式が同時に催される。 十一月二三日、ＮＨＫラジオ北海道放送「ラジオ北の文芸館」で、「雪の夜の記憶」が朗読、放送される。 また、三十日、ＮＨＫラジオ第一放送「ラジオ深夜便」（放送は翌日午前一時）の中の「北海道発ラジオ深夜便」で再放送される。	「本格小説」水村美苗 アメリカで同時多発テロ発生 野依良治ノーベル化学賞受賞 「文 壇」野坂昭如

土合弘光氏作成による「八木義徳の軌跡」(2010年5月3日公開)		
２００２年 （平成１４）	十月二十一日、八木正子未亡人が故八木義徳本人の遺言に基づき、故郷北海道室蘭市に六四年間にわたる執筆活動中のあらゆる著作物の著作権を同市に譲渡する贈与証書を寄託する。 十一月二三日、ＮＨＫラジオ北海道放送「ラジオ北の文芸館」で、「摩周湖」が朗読、放送される。 また、二九日、ＮＨＫラジオ第一放送「ラジオ深夜便」（放送は翌日午前一時）の中の「北海道発ラジオ深夜便」で再放送される。	
２００６年 （平成１８）	十月二七日、東京都町田市ゆかりの作家の資料を展示した「町田市民文学館　ことばらんど」が同市原町田四丁目に開館、書簡・初版本等文学資料が展示される。また十二月十七日、同館開館記念連続講座「町田ゆかりの文学に親しむ」の第一回目「八木義徳をめぐって」が同館で開講され、文芸編集者根本昌夫が「文学の鬼を志望す」と題し講演する。 十一月一日、NHKテレビ北海道「ほっからんど」の中で、「北海道名作の旅 ・八木義徳“海明け”の舞台を追う」が、また同月二九日にも「北海道名作の旅・阿寒湖と屈斜路湖、摩周湖を訪ねて」で八木義徳の「摩周湖」が放映される。	
２００８年 （平成２０）	九月二十七日、室蘭文化連盟主催、白鳥大橋開通十周年記念・第一回市民文学祭「八木義徳を読んだか！？」が室蘭市東町の室蘭市中小企業センターで開催され、八木義徳について感想文を発表し語り合った。以降毎年九月に、八木義徳へのメセージを発信する「市民文学祭」が開催される。 十月十八日から十二月十四日まで、東京都町田市原町田四丁目の「町田市民文学館　ことばらんど」で、町田市市制５０周年記念特別企画展「文学の鬼を志望す ― 八木義徳」展が開催され、芥川賞正賞の鉄薬硯や自筆原稿など作品ゆかりの資料約３００点が展示される。同時に、町田市民文学館ことばらんど編<町田市市制５０周年記念特別企画展　文学展図録>『「文学の鬼を志望す ― 八木義徳」展』が、また十一月には、土合弘光編著『町田市市制５０周年記念 心には北方の憂愁 ― 八木義徳書誌 ―<１９３３―２００７>』が「町田市民文学館 ことばらんど」より刊行される。 また十一月二日、早稲田大学名誉教授・紅野敏郎が「八木義徳の戦後出発 ― 劉廣福から母子鎮魂へ」、同月二十三日、作家・佐伯一麦が「八木文学から受け継ぐもの」と題し、それぞれ記念講演が行なわれる。	
２００９年 （平成２１）	一月三十一日から三月二十九日まで、札幌市中央区中島公園の「北海道立文学館」で、没後十周年記念企画展「文学の鬼を志望す　八木義徳」展が開催され、生原稿や書簡、道内初公開の「戦後日記１９４６」などの文学資料約３００点が展示される。同時に北海道立文学館編『企画展 「文学の鬼を志望す ― 八木義徳」』<文学展図録>が北海道立文学館より刊行される。 また一月三十一日、関連行事として朗読会「八木義徳の世界」が開催され、朗読者・館野直光、ギタリスト・若狭弘樹が「海明け」の一節を朗読する。ついで二月一日、文芸評論家・木原直彦が「八木義徳と北海道の風土」と題し、講演会が行なわれる。 九月十九日、八木義徳没後１０周年記念事業として「北海道立文学館出前講座朗読会」が北海道室蘭市海岸町３丁目の「室蘭市港の文学館」で開催され、朗読者・館野直光、ギタリスト・若狭弘樹が、「海明け」と「一枚の繪」の一部を朗読する。	
２０１０年 （平成２２）	三月十四日、テレビ朝日系列「地球物語」の「知床半島流氷ウオークで冬体感」で、その冒頭と終末に『海明け』の一節である「これが海明けだ！ 白い流流氷群は夢幻の彼方へと消え去り　海のいのちがいま蘇ろうとしている」が採り上げられる。	